

〈50周年記念号に寄せる〉 発刊のことば

1965. 3. 25

神奈川大学 研究所
所長 草薙 正夫

周知のように、日本の近代性は、明治から大正期にかけて、もっぱら西洋近代文明を摂取することによって形成されてきた。従って西洋近代文明と日本近代文明とは、これからの成り行きにおいて、共通の運命を負わされざるをえないであろう。ところで今日われわれは、西洋近代文明のゆき詰りという言葉、しきりに耳にするのであるが、もしこの言葉が真実を含んでいるとするならば、今日吾々が当面している世界共通の歴史的課題は、近代の超克という課題に他ならないであろう。このような超克によって齎されるものが如何なるものであるかを、吾々はまだ充分に予見することはできない。しかし来たるべき新しい文明の性格を特徴づけるものが、本来の意味における世界性であるということだけは、推察するに難くないであろう。というのは、この世界性ということは、すでに近代文明それ自らの中から生まれ出てきたものに他ならないからである。しかしここでいわれる新しい世界性ということは、決して民族性を含めていふところの人間の実存の疎外を意味するものであってはならない。むしろそれは、西洋近代文明において喪失せられた人間の実存の救出を目指すものであらねばならない。これが近代性の超克が意味するところのものであろう。

その限りで、来たるべき新しい文明形態の発生は、近代文明と異質文明或は民族的伝統との対決を必然的前提としなければならないであろう。その意味で今日如何なる文化形態といえども、学問の世界的視圏の外へ逃れ去ることはできない。最近特に目立ってきた欧米における日本研究や、我国における伝統論は、その意味で注目すべき学問的現象といえよう。そしてそれが東西両文化の比較学という学問的形態と問題意識において現実化されてきていることは、その意義の特徴を示すものであろう。

このような観点から見て、日本の学問的使命は特に重大であると思われる。というのは日本は、かつてインド仏教によって代表されるインド文明と、儒教によって代表されるシナ文明との出会いと対決を通じて、もはや単なるインド文明でもなく、また単なるシナ文明でもなくして、理念としての東洋文明が、歴史的に現実に生きてきた国であり、さらに明治以後この東洋文明と西洋近代文明とが出会い、且つ対決を続けてきた世界最初の国だからである。もし日本民族が、単に西洋近代文明の模倣と追従に甘んじることなく、独自の文化的創造を企てようとするならば、まず我が国における現在の東洋文明と西洋近代文明との対決の決算を行うことが先決問題であるだろう。それは日本文化史それ自らにおける必然的な歴史的課題でなければならない。ましてや上述したような、来たるべき新しい世界文明が、東洋文明と西洋近代文明との対決を前提とするならば、吾々の課題は、同時に現在の世界文化史の課題に直結するものであるといわねばならないだろう。日本が東洋と西洋の橋渡しであるといわれるのも、その意味であらう。

私どもの研究所は、このような現代における精神科学の新しい問題意識と学問的使命への反省に基づき、また私どもの大学がおかれている横浜という都市が、長崎とともに、西洋近代文明流入の門戸として、日本の近代化の発祥の地であるという立地条件に基いて、その研究活動の主要使命を比較文化学の

研究と確立においてきた。しかし発足以来僅かに一年を経過したにすぎない。現実の状況のもとでは研究準備のためだけにでも、なお数年を要することと思われる。しかし吾々の有能な所員諸氏は旺盛な研究意欲と真剣な問題意識をもって、研究所の目的達成のために献身的努力を払っておられることは、感激に堪えない次第である。

発足以来僅か一年にして、ともかくも所報を発刊することができたのは、このような所員諸氏の献身的努力の賜ものに他ならない。このような現在の状況のもとにおいて発刊せられたこの所報が、その質と量において満足のできるものでないことはやむをえないことであって、その一層の充実は、今後に期せざるをえない。しかしこのささやかな所報を通じて、いささかでも学会の注目と共鳴と協力を賜わる機会を得ることができるならば、悦びに堪えない次第である。